

# 少林寺拳法部

少林寺拳法部facebookページ

<https://www.facebook.com/shorinjisakuminami>

部員 男子12名 女子4名 合計16名

部長	田村 昌夫
事務局	同上
副部長	小林 貴志夫
副部長	草間 寿光

NO	主催	事業名	期日	会場	参加対象	参加者	担当地区
1	○	少林寺拳法修練	4月-2月 (火・金)	臼田武道館	拳士	25	佐久支部 臼田支部
2		県大会	8月21日(日)	茅野市総合体育館	拳士	400	長野県
3		第29回東信地区交流会	10月1日(土)	佐久市創錬センター	拳士、来賓、一般	100	長野県
4	○	納会	12月17-18日	平宿泊棟	拳士・保護者	70	佐久支部 臼田支部
5	○	新春法会 稽古納め 鏡開き	1月7日	あいとびあ	拳士、来賓、一般	50	佐久支部 臼田支部

## □少林寺拳法を教育に活かしたい

少林寺拳法 佐久平南道院 田村昌夫

少林寺拳法は、太平洋戦争敗戦間もない大混乱の中「日本の再建をしたい。良くしたい。」という宗道臣先生の願いから、「人の質の向上を願う・・・人作り」を目的として、1947年 今から70年近く前に四国多度津町で創始された人作りを目指した武道です。そして、教育です。

勇気と慈悲心と行動力があり、自分自身に自信が持てる。しっかりした自分作りを『自己確立』といいます。少林寺拳士がまず己です。そんな自己確立を目指しながら、周りの人 地域の人と互いに協力し助け合い、互いに理解あって幸せに暮らせる社会を作ろうとすることを『自他共楽』といいます。

開祖は『半ばは自己の幸せを 半ばは他人の幸せを』という言葉で表しました。この二法を礎として少林寺拳法は、スタートしました。

今の日本では、『魔ーいや。これぐらいは。』という自己の甘えからの危険ドラッグや飲酒による事件事故。『自分さえよければ、人はどうなってもかまわない。』という自己中心的な考えによる高齢者への携帯などの詐欺。『人を思いやる優しさの欠如によるいじめ』の問題。核家族化、地域連帯の欠如、人間関係の稀少化から、もたらされた老人孤立死、そして10年前の五倍以上と増え続ける児童虐待。以上のことは、後を絶たないばかりか、増え続ける傾向にあります。

戦後の教育の中で大切にされた「個性尊重」それともなう「自由と権利の主張」は、もう二度と戦争は起こしたくない。一人ひとりを大切にされなければならぬというものでした。

個人の権利を追求し、物質の豊かさを求めてきた結果が、自然を敬ったり伝統を大切にする畏敬の念を稀有かし、自己の権利ばかりを主張するモンスターペアレントを生み出したり、自殺にまで追いやるいじめを起し、自己の欲のために犯罪まで犯すといった社会不安を生み出しています。

人間には、自分を守ろうとする本能と自分の種族を残そうとする動物的本能があります。動物である以上だれもが持つ本能であり、なければならぬものです。ウソをついたり、自分の有利なようにしてしまったりするのは自己防衛本能です。また、人を好きになったり、逆に嫌ったり、カッコつけたり自分を美しくありたいとするのは種族保存本能です。

この本能が強すぎ、自分のことしか考えられなくなってしまうと、他の人が邪魔になったり、いじめたり、最悪殺してしまうようなことが起こるのだと思います。少林寺開祖は、「己のない心」と「己しかない心」が世の中をダメにすると常々語られておりました。

この動物的本能が、適切に働き、自己中心的にならないようにしているのが、人間的本能一人間だけにあるといわれている大脳新皮質という部分の働きです。その働きとは、「人に喜ばれるとうれしい。」「社会のため・人のためになりたい。」「正義の使者になりたい。」という美しい心（おもてなしの心に通じる心）です。人に与えられた使命ともいえる働きで、魂といわれる部分です。

この心は、人間ならだれでも持つ心です。特に小さい子供達には、大変強い心のように思えます。この心がしっかりと育たないと、人の心が考えられない、人の悲しみに寄りそうことが出来ない人間になってしまいます。この心を育てることこそが、教育であり、日本をはじめ世界の願いであり少林寺拳法の願いでもあります。

ゴミが落ちている。「自分のゴミでないから、自分には関係ない。」と通り過ぎてしまう。「見えなかった。気が付かなかった。」という無関心。これは損得判断です。「ゴミを片付けよう。きれいにしよう。なんとかしたい。」と判断するのが善悪判断です。人間は物事を損得か善悪かで判断して行動してまいります。

「ゴミを拾おう。」「靴をそろえよう。」「明るいあいさつをしよう。」「掃除をしてきれいにしよう。」「困っている人を助けよう。」「いじめを止めよう。」

こうした善意の心を持ち、判断をしっかりとし、そして行動できる心＝人に喜ばれるとうれしい。と志（世の中の役に立とう）を持つ人を、護身の技術を通し、教を通して、育成しようと少林寺拳法は取り組んでいます。

「人間は、一人ひとりが生かされている存在である。」という心が育てば、互いに大切にしようことへ。社会奉仕の心へ。そして、自分が価値ある存在へと繋がっていくのではないのでしょうか。少林寺開祖は、強い人が弱い人を助け(背負い) 互いに助け合いながら進む。これを表す象形文字が「行」であると説かれ、目標とすべき社会の形であるとされました。

日頃の修練を積み重ねるスポーツが、一人ひとりに自分の存在に自信をもたせ、社会と交わり貢献していくならば、よりよき日本を築き、世界の平和に貢献して行く一灯明になれるのではないのでしょうか。

一月号の『致知』に SBIホールディング社長 北尾吉孝氏の記事がありました。

国家や社会をよりよい方向に変えるには、詰まる所私たち一人ひとりが自己維新する以外に方法はありません。よりよい方向に変わっていた人たちの集合体によって、世の中のおかしな動きは、未然に食い止められることでしょう。

政治家や経済人が変われば、教育者が変われば、ということよく口にします。もちろん政治家や経済人、教育者が変わらなくては社会は変わりません。しかし、肝心なのは、それを構成する一人ひとりの意識の変革です。自ら磨き自己維新する人が増えてこそ、私たち人類の未来も開かれていくことを忘れてはなりません。

教育者であり哲学者である 森信三先生は、日本人の生き方として、時処位の自己限定をすべきとしています。明治の時代、それまで培われてきた「一所懸命の精神」 論語修学の「素業自得」の精神が相まって、「その時、その場所でその立場で、自分のできる限り行う」という時処位的な生き方を多くの若者が行った。それが故に、明治維新が成しえた。こうした生き方を日本人一人ひとりがすべきであると述べています。

一人でも多くの人間本来の使命を自覚し、人の為世の為に役立つ人間になろうという志を持つことが、平和で明るい社会へと繋がるのではないのでしょうか。スポーツはその人間形成の一端を担っていることを常に意識し、単なる目先の勝負や健康作りだけに留まることなく、その奥にある人間形成に目を向けていくことで、社会への貢献が図れることを意識し、活動を積み重ねていこうではありませんか。